

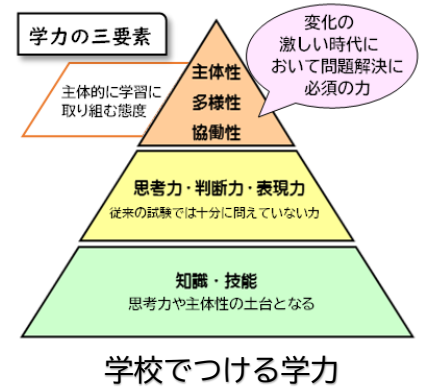
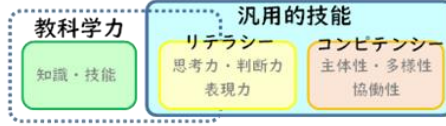
# 広沢小の子どもたち



## 保護者の皆様へ

本年度実施された全国学力・学習状況調査(6年生対象)及び、埼玉県学力・学習状況調査(456年生対象)における広沢小の子どもたちの概要をお知らせします。子ども一人一人の成長のために、子どもの生活習慣や学習習慣をよりよいものにする家庭実践項目の取り組みを進めていただければ幸いです。

なお、本調査により測定できるのは、学力の一部であること、学校における教育活動の一側面に過ぎないことをご理解ください。また、調査結果が序列化や過度な競争につながらないように十分配慮ください。本資料もそのあたりを十分踏まえた内容となっています。



学校でつける学力

## 教科の平均正答率・児童生徒に対する調査の結果から見える小学生の課題

今回の調査では、国語と算数(456年)、理科(6年)にも共通する日本の子どもたちの学力の弱点が明確になってきました。本校の子どもたちにも同様の傾向がみられました。それは、記述式を伴う「思考力・判断力・表現力」に関する問題です。この問題の正答率から見えてきたこと弱点は、「説明力」です。

説明というただの表現力の問題だと思われがちでしたが、それだけではなく思考力の弱さとも深く関わっていました。そして、何を問われているのか、求められているのかを理解する「読解力」の問題でもあります。



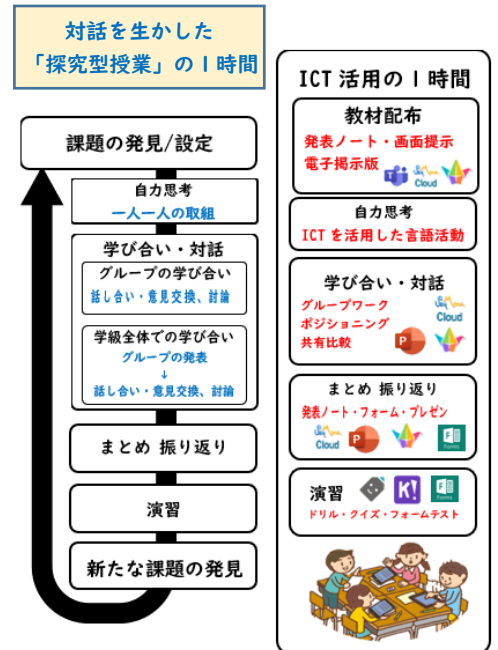
## 対話型の授業を通して、課題解決

これまで、授業の中では、講義の形で正解を導き出すことが中心でした。

講義型の授業に比べて、対話を重視した授業では、自分で考え、意見を説明する機会が圧倒的に多くなります。異質な意見の相互発見、討論による多面的意見が生まれてきます。思考や判断は、説明という形でアウトプットすることで思考がクリアになっていき、話し合いや討論を行う中で、子どもは新しい見方や考え方を獲得していけることが期待できます。

これからは、対話を通して、問題点や不十分な点を発見したり指摘したりしながら、その改善の方法を多面的に見つけ出すという批判的に捉える学習を、重視していきます。

また、タブレット PC を活用することで、文字等の視覚情報を中心とした情報のやり取りを通して、限られた時間の中でも対話を充実させることが可能となります。ICT の活用とそこで生まれる時間を活用することで、何を問われ、求められているのかを互いに共有し「不完全さや不十分さ」を解決していく授業の充実を図っていきます。



## 「子どもは大人の『言うこと』ではなく『やること』をよく見ている！」

これは、わたしたちが常日頃から気を付けていることですが、家庭環境と子どもの学力の関係についても、この言葉に関係するような傾向が明らかになりました。

それは、「大人の知的好奇心」が子どもの学力に関係していることでした。例えば、子どもと一緒に美術館・劇場や博物館・科学館、図書館といった文化施設に出かけたり、親が本を読む姿をよく見ていると、そのような親の心理傾向が子どもにとって知的刺激に満ちた環境を生み出すことにつながっていきます。

こうしてみると、子どもたちの学力を高めたいと思うなら、まずは我々大人が知的好奇心をもち、知的刺激を求めるように心がけることが大切といえそうです。

本調査により測定できるのは、学力の一部であること、学校における教育活動の一側面に過ぎないことを踏まえるとともに、序列化や過度な競争につながらないように十分配慮しています。